

『ダークエコロジー』

公害企業主呪殺祈祷僧団(羽永光利)

2023年9月29日(金)～10月22日(日)

12:00-19:00 *金・土・日 のみ開廊

助成:公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京 [芸術文化魅力創出助成]

協力:羽永光利プロジェクト実行委員会 羽永太朗 | ぎやうり壺中天 | 青山目黒

キュレーション: アサクサ

細胞一個の生命体もわれわれ人間も、ともにこの宇宙のすべての因果関係のなかで生命活動を維持していると仏教はみてきた。だから、公害はたんに、海が汚れているとか、空気がきたなくなるというだけの問題でなく、こうした人間を含めての、すべての生命体の環境バランスを破壊することで、生きとし生けるものへの挑戦にほかならない。——松下隆洪(呪殺祈祷僧団)*

高度経済成長期、環境汚染を伴う公害が表面化し、イタイイタイ病や四日市ぜんそくなどの公害病が日本各地の住民を襲いました。1970年には、公害病の原因となっていた企業への抗議活動として、2名の仏僧を中心に呪殺祈祷僧団が結成されます。彼らは、抗争が続く全国の工業地帯へ行脚し、撃鼓唱題し、護摩祈祷の火を焚き、阿毘遮迦(アビチャールカ)と呼ばれる調伏の儀式を行いました。公害を引き起こす企業主を、死に至らしめるために——。

芸術、政治、宗教を縦断し、密教呪術の実践と思想に裏付けられた前衛的活動を展開した**呪殺祈祷僧団**(1970年-不明)は、公害がもたらした精神的・肉体的な苦難への復讐を目論み、急速に近代化する戦後社会の多岐にわたる不正の実態を暴こうとしました。この行動は、近代の司法制度では不能犯と見做され訴追ができない「呪殺」という方法で挑んだ、企業家に対する「仏教的テロリズム」だったと言えるかもしれません。当時、日本社会の暗部で繰り広げられた出来事を追っていたドキュメンタリー写真家**羽永光利**(1933-1999)は、こうした僧団の活動に共鳴し、自らも出家して僧団の一員となり、行脚を共にする中で300枚に及ぶルポルタージュ写真を残しています。

呪殺の旗を掲げる一方で、公害に苦しむ村落を訪れ、被害者に捧げる呪殺祈祷僧団の祈りは、9世紀以降に真言宗がたどった過去の転覆をも示唆します。鎮護国家の名の下に、呪術が体制側に利用された歴史を批判し、宗教の力を権力者から困窮者の手に返すことを意図していたからです。同時に、草木も仏性を具えていて成仏するという、草木成仏の考えに立ち、当時、公害を階級問題に結びつけていたマルクス主義者や市民運動家とは距離をとり、その人間中心的な考えを批判します。やがて、近代化以降の開発と資本の追求の結果、汚れていく大地に立ちつつ他生物と共存していく倒錯的で暗いエコロジーに共鳴するかのように、生命の因果関係を繋ぐ暗く奇妙なループを辿りながら、アナーキーで前衛的な態度へと変容していきます。

本展タイトルは、長年、環境アクティビズムに身を捧げ、その後のグローバル環境主義を激しく糾弾するに至った著述家ポール・キングスノースによる同名の著作**を参照しています。数学者セオドア・カジンスキーに触発されて書かれたこのエッセーで、キングノースは自身の怒りに向き合い、進歩的な思想を退け、非文明への力でエコジェノサイドの回避する方策を探っています。

香港Parasiteレジデンシーで2019年に実施した「呪いのマントラ」を基に構成された東京展では、呪殺祈祷僧団の一員だった真言宗僧侶 松下隆洪氏によるテキストと、羽永光利(1933-99年)のドキュメンタリー写真を合わせて展示いたします。

謝辞:ダリル・ゼミソン、ジョナサン・ホフマン

* 松下隆洪「公害企業主呪殺と敵討の復讐」、『現代の眼』、現代評論社、1971年(2月号)

** Paul Kingsnorth, "Dark Ecology: Searching for Truth in a Post-green World", *Orion Magazine*, 2012. URL: <https://orionmagazine.org/article/dark-ecology/>. Published on paper, in: Paul Kingsnorth, *Confessions of a Recovering Environmentalist and Other Essays*, Graywolf Press, 2017.



羽永光利《公害企業主呪殺祈祷僧団》1970年頃、35mmフィルム・モノクロ



羽永光利《公害企業主呪殺祈祷僧団》1970年頃、35mmフィルム・モノクロ

アーティスト

羽永光利 (東京生まれ、1933-1999年) は、芸術、政治、社会の交差領域で活動するフォトジャーナリストであり、1960年代から80年代までの前衛芸術と学生運動の熱心な支持者。羽永作品は、『朝日グラフ』(1970年)や『LIFE』(1964年)などの影響力のある雑誌に掲載されているほか、展覧会やパフォーマンスの歴史的に貴重なドキュメンテーションとして近年再び注目を集め、ポンピドゥーセンター(パリ、1983年)、アジア文化センター(光州、2015年)、テートモダン(ロンドン、2015年)、国立近代美術館(東京、2018年)など、国内外で展示歴多数。

助成

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
【芸術文化魅力創出助成】

協力

羽永光利プロジェクト実行委員会
羽永太郎 | ぎやらり壺中天 | 青山目黒

展覧会情報

タイトル: 『ダークエコロジー』
作家名: 公害企業主呪殺祈禱僧団(羽永光利)
会期: 2023年9月29日(金) - 10月22日(日)
会場: アサクサ 東京都台東区西浅草1-6-16
開廊: 金・土・日 12:00~19:00

URL: www.asakusa-o.com
Facebook: <https://www.facebook.com/asakusa-o/>
X (Twitter): [@asakusa_o](https://twitter.com/asakusa_o), #asakusa-o
Instagram: [asakusa_o](https://www.instagram.com/asakusa_o)

プレス連絡先: info@asakusa-o.com
090-8346-3232(大坂)

本展は、羽永太郎氏の協力のもと、青山|目黒と共同でキュレーションした展覧会「Curse Mantra」(香港Parasiteレジデンス)を基に構成されています。



関連企画

展覧会名: ASAKUSA-YOKOSUKA
アーティスト: アダム・カリル、ベイレイ・スワイツァー、アントン・ヴィドクル、羽永光利他
会期: 2023年9月16日(土) - 10月8日(日) 11:00-19:00
定休日: 月・火・祝日
会場: TALION GALLERY 東京都豊島区目白2-2-1 B1
企画: 大坂絃一郎 (ASAKUSAディレクター) 上田剛史 (TALION GALLERY ディレクター)
協力: 青山|目黒
ウェブ: <https://taliongallery.com/>

関連パフォーマンス

タイトル: listening stones making landscapes
アーティスト: ミハイル・カリキス&マルアン・シバート
会期: 2023年10月8日(日)
会場: アサクサ 東京都台東区西浅草1-6-16
詳細は、ASAKUSAウェブサイトにて告知いたします。
ウェブ: <https://www.asakusa-o.com/>

関連ウェブサイト

本オンラインプログラムでは、香港Parasite レジデンスでの展示をオンラインで再現し、福岡在住の作曲家ダリル・ゼミソンが草木成仏の観点から、香港のジョナサン・ホフマンが仏教学者の視点から、仏教環境活動家としての呪殺祈禱僧団の側面を解説します。

会場: 0-eA (オンライン)
主催: サードリサーチラボ
協力: ASAKUSA
メディアパートナー: 0-eA

こちらのリンクから、映像プログラムが開始します。
<https://0-ea.art/journeys/AjoNh/eXf.html>

